

法助動詞と属性抽出語の交替現象 —「名詞句-の-ようだ」構文を中心に—*

板東美智子・黄愛玲

滋賀大学, SILS 客員研究所員・国立高雄科技大學

bando[at]edu.shiga-u.ac.jp; ayling[at]nkust.edu.tw

Functional alternation between modal auxiliary verbs and attribute abstractors: With special reference to *DP-no-yooda* constructions

BANDO Michiko and HUANG Eileen

Shiga University; National Kaohsiung University of Science and Technology

Abstract

本稿は、助動詞「-の-ようだ」がその補部に名詞句を伴い、法助動詞として機能して「推量」の意味と、属性抽出語として機能して「比況」の意味を表す多義的な単文を扱う。例えば、「あの人は子供のようだ」の構文は、(i) 「あの人はどうやら子供のようだ」のような話者の「推量」を表すと同時に、(ii) 「あの人はまるで子供のようだ」のような主語の属性を抽出して「比況」の意味を表す。本稿は黄(1999)の「よう」の観察と、奥津(1999)、西山(2003)、田村(2022)の「の」には述語性をもつ機能があるという指摘を基に、それぞれの構文の統語構造(cf. Miyagawa 2022)と意味計算(cf. 郡司 2015)を形式的に記述し、どのように法助動詞として、あるいは、属性抽出語として機能するときがあるのかを各構文の構成性の違いで説明する。

This paper investigates the phenomena of a functional shift between modal auxiliary verbs and attribute abstractors seen in Japanese *DP-no-yooda* constructions. For example, in the sentence like *Ano hito-wa kodomo-no-yooda*, we can read it in two ways: (i) That person seems to be a child; (ii) That person is childish (i.e.,

*本稿は 2022 年 10 月 27 日、大阪大学言語文化学会第 61 回大会で口頭発表した内容を改訂し執筆したものである。執筆前、郡司隆男先生、高橋有香さん、澁谷みどり先生、日高俊夫先生には内容につき何回か議論していただき示唆に富んだコメントや質問をいただいた。とりわけ郡司隆男先生には我々が大学院生の時から研究へのご指導ご支援をいただいている。これまでの先生のご助言がなければ研究を前に進めることができなかっただろう。心より感謝申し上げます。

the subject, *ano hito*, is small, cute, naive, etc.). The *-yooda* in the reading (i) functions as a modal auxiliary verb, while that of (ii) works as an attribute abstractor, an auxiliary which abstracts the subject's attribute(s). The purpose of this paper is to make the mechanism of the functional alternation explicit. Based on the observation of the differences between modal *-yoo* and attribute abstractor *-yoo* by Huang (1999) and paying attention to two kinds of *-no* (cf. Okutsu (1999), Nishiyama (2003), and Tamura (2022)) in a *DP-no-yooda* phrase, we will suggest each one's syntactic (cf. Miyagawa 2022) and semantic (cf. Gunji 2015) computation formally and show that the functional alternation occurs through each process of compositionality.

キーワード: 推量、比況、「-の-」、コピュラ動詞、構成性

Keywords: supposition, comparison, *-no-*, copula, compositionality

1. はじめに

日本語の助動詞には名詞句と共起して複数の機能を示す場合がある。例えば (1) では、「ようだ」は名詞句と共起すると「の」が付加されて、文脈がない単文では、法助動詞として機能している読みと、主語の属性を抽出する助動詞として機能している読みがある。後者の機能を黄 (1999) および本稿では属性抽出語と呼ぶ。

(1) あの人は子供-の-ようだ。

(2) はそれぞれの機能を際立たせる副詞句を追加した例である。

(2) a. 「推量」：あの人はどうやら子供-の-ようだ。

b. 「比況」：あの人はまるで子供-の-ようだ。

(2a) の文は、「ようだ」が「法助動詞」として話者の認識である「推量」を示し、(2b) では、属性抽出語として主語が子供がもつ属性（「無邪気だ」「かわいい」など）を示していることを表す。(2b) の読みを先行研究にならって「比況」と呼んでおく。

なお、「名詞句-の-ような-名詞句」句は「推量」「比喩」「例示」の多義を示す。

(3) a. ライオンのような (/みたいな¹) 動物がアフリカで取ったビデオに写っていた。

→ ライオンかどうかわからない。：推量的な意味：不明関係

b. ライオンのような (/みたいな) 犬がいた。

→ ライオンではない。：比喩的な意味：不一致関係

c. ライオンのような (/みたいな) 肉食動物は生肉からビタミン類を摂取する。

→ ライオンもそうである。：例示的な意味：包含関係

(森山 1995: 493)

¹「みたいな」は「見た様だ/見たようだ」の変形。「ようだ」よりも話し言葉的であるが、「ようだ」と同じ「推量」「比喩（あるいは、比況）」「例示」用法をもつため、「ようだ」と同じとして扱っている。

本論では、まずは(1)のように文末に「ようだ」がくる例を分析していくこととする。同じ名詞句を伴いながら、どのような状況によって「ようだ」は(i)「推量」の法助動詞に、あるいは、(ii)「比況」の属性抽出語に決められるのだろうか、その条件を明らかにしてみる。その過程で、(i)については、同時に、「推量」の「名詞句+のようだ」構文がどのように名詞句を(4)のような「命題(TP)」として解釈しているのかについても考察する。

(4) [CP [TP 命題] モダリティ] (仁田 2014: 614, 一部追記)

以上の問題を、黄(1999)の分析をふまえて、法助動詞として「推量」読みが生じる場合、属性抽出語として「比況」読みが生じる場合を統語構造の違い、および、意味的構成性の違いとして形式化していくこととする。

2. 「名詞句-の-ようだ」構文の観察

本節では、「名詞句-の-ようだ」の構文をもう少し詳しく観察してみよう。まず、法助動詞としても属性抽出語としても「ようだ」が名詞句と共起すると(5a)のように「の」が出てくる。

- (5) a. あの人は子供-の-ようだ。
b. *あの人は子供-ようだ。

「ようだ」は、形式名詞「様(よう)」に断定の助動詞「だ」が付いたものとされる。従って、(5a)の例では、「子供のようだ」の句形成は、「子供(名詞句)+の+様(名詞句)-だ」と分析できる。では、名詞句と名詞句をつなぐ「-の-」の機能は何だろうか。先行研究の知見を紹介して「名詞句-の-ようだ」の二通りの読みとの関連性を指摘したい。

2.1. 「-の-」の機能

奥津(1978, 1999)は以下の根拠をもとに、原則として「雪舟ガ子供ノ時」のような名詞句の「ノ」を「ダ」の連体形と考えたいと述べている。その根拠として、まず、(6)を挙げている。

(6) 今日オ休ミノ先生 (奥津 1999: 130)

「今日」という時の名詞は、時格の連用修飾句として何かの述語の存在を要求する。それは「オ休ミノ」という部分を除いて他にはない。従って、これは「先生ハ今日オ休ミダ」型の文として解釈せざるを得ない。そして、主語の「先生」が、「オ休ミダ」の後に置かれて被修飾名詞になったものと分析している。

その他、擬態語を含む副詞句や従属節も「ノ」の前に来る例を挙げている。

- (7) a. モッパラノ噂
b. 西二向ッテノ大追跡

c. 最上階ノ展望回廊マデタッタ 30 秒デスーノ予定

(奥津 1999: 135-136, 138)

連用修飾語は何かの述語を修飾するのが役目なのだから、(7a, b, c)の「ノ」は「ダ」のように述語性をもつものでなければ、連用修飾語は行先を失ってしまう、と説明されている。

比較的最近の研究においても、「ノ」を述語、特に「である」、と言い換えが可能なコピュラ連体形の「ノ」を認めている。西山 (2003: 16-58)、田中 (2012) の「名詞句 + ノ + 名詞句」の例をみてみよう。(8a)の「ノ」は(8b)のように「の」を「である」にしか解釈できないため、コピュラ連体形の「ノ」と呼んでいる。

- (8) a. 北海道出身の俳優
 b. 北海道出身である俳優
 c. *北海道出身で売っている俳優、*北海道出身とされる俳優、...

(田中 2012: 36)

一方、(9a)の「ノ」は(9b)のように「である」以外で解釈するため、連体助詞の「ノ」としている。

- (9) a. 太郎のパソコン
 b. *太郎であるパソコン
 c. 太郎が所有しているパソコン、太郎が使用しているパソコン、...

(田中 2012: 36)

以上の先行研究が指摘する「だ」の連体形としての「の」が「名詞句+の+よう (= 名詞句「様」)-だ」構文の「の」の機能でもあるかどうかみてみよう。

- (10) a. あの人はどうやら子供{の/である}ようだ。(推量)
 b. あの人ハマるで子供{の/*である}ようだ。(比況)

「推量」読みの(10a)の「の」は「である」と交替できる。こちらはコピュラ連体形と分析できる。辞書(明鏡国語辞典)の注釈にも「ようだ」の前に「である」を入れられれば「推量」の法助動詞であるといった記載がある。本論では、(10a)の結果から、「の」が既に「である」(あるいは、その簡略形「だ」として機能していると仮定する。「比況」読みの(10b)の「の」は「である」と交替ができない。この「の」は連体助詞ということになるだろう。

2.2. 補部名詞句の解釈

「-の-ようだ」が取る補部名詞句の解釈についても、「推量」読みと「比況」読みでは異なることが観察される。その違いをいくつかの言語テストでみてみよう。まず、否定語「ない」が現れる位置を観察してみる。「推量」読みの場合、(11a)のように文末に「な

い」を置くと非文法的であるが、(11b)のように「の」を「で」にすれば、「ようだ」の補部を否定することができる。「で」は「だ」の連用形である。

- (11) a. *明日はどうやら雨-のようで-ない。
b. 明日はどうやら雨-でない-ようだ。

(11b)からも肯定文のときの「-の-ようだ」の「-の-」がコピュラ動詞の連体形であったことが伺える。「比況」読みの場合は、否定語「ない」は(12a)のように文末のみ現れることが可能である。(12b)の「雨」に否定語を続けることはできない。

- (12) a. この雨はまるで雨-のようで-ない。
b. *この雨はまるで雨-でない-ようだ。

「比況」読みの場合は、「雨-の-ようだ」の「の」は助詞とすることが支持されるだろう。上記の否定文の観察から、肯定文の「雨-の-ようだ」の補部名詞句「雨」にも解釈の違いが感じられる。「推量」読みの場合の「雨」はコピュラ動詞の「の」が続くとすればそれは出来事的であり、「比況」読みの場合の「雨」が名詞句と名詞句の連続であれば、前の名詞句の「雨」は後続する「様」を形容している関係になるだろう。

この予測を、次の時間の副詞句の修飾関係で検証してみよう。「推量」読みの(13a)の場合、「雨」が降った可能性は昨日の午前中で、「推量」したのは昨日の午後という解釈が可能である。一方、「比況」読みの(13b)の場合、雨のような天気だった時間と、話者が雨に例えた時間が別々である読みは困難である。

- (13) a. 昨日の午前中はどうか雨のようだった。
b. 昨日の午前中はまるで雨のようだった。

つまり、(13a)では「雨」自体が「推量」した時間とは異なる時間を持つことができるため、出来事的であるが、(13b)の「雨」は時間の副詞句で修飾できるような出来事読みは不可と言える。

最後に、固有名詞が二人出てくる構文を観察してみる。「推量」読みの場合、(14a, b)ともに「主語名詞句 = 補部名詞句」であろうことを推量している。

- (14) a. 良子はどうやら暢子のようだ。(良子 = 暢子)
b. 暢子はどうやら良子のようだ。(暢子 = 良子)

(14a)であれば、「良子」という指示対象は「暢子」というペンネームを使っている人物と推測しているような状況が想像できる。「比況」読みの場合は、主語名詞句は「個体」、補部名詞句はその名詞句がもつ「特徴」のみを指しているのではないだろうか。例えば、(15a)であれば、「良子」は「暢子」が持っている性格の特徴をよく示す、という状況であろう。

- (15) a. 良子はまるで暢子のようだ。(良子 ≠ 暢子)
b. 暢子はまるで良子のようだ。(暢子 ≠ 良子)

2.3. 観察からの仮定

前節での観察から、「推量」読みの場合の「-の-ようだ」の補部名詞句について、

- 「推量」の「-の-ようだ」は主語と補部名詞句を「主語名詞句 = 補部名詞句」という命題として解釈している。
- “=”の関係は統語上は現れないが、意味的にコピュラ連体形の「の」が担っている。(cf. 奥津 (1999), 西山 (2003), 田中 (2012))
- 「推量」の「のようだ」の主語名詞句が指示対象をもつ「個体」であれば、上記のようなイコール関係の状況では、補部名詞句も指示対象をもつ「個体」として解釈される。

「比況」読みの場合の「名詞句-の-ようだ」の補部名詞句については、

- 「比況」の「のようだ」の「の」は連体助詞の「の」である。
- 「比況」の「のようだ」の主語名詞句は「個体」を表し、補部名詞句はその名詞句がもつ「特徴」のみを表している。

以上のようにまとめておく。次節からは、「名詞句-の-ようだ」構文の「推量」読みと「比況」読みのそれぞれの統語構造とそれに続く意味の計算を形式的に表示して、二通りの解釈が生じるプロセスを明らかにしていくこととする。

3. 「推量」の「名詞句-の-ようだ」構文の統語構造と意味計算

本節では、「属性」というキーワードで前節で観察した特徴に規則性をもたせた黄 (1999) の記述をもとに、「名詞句-の-ようだ」構文が法助動詞として機能して「推量」読みを派生するプロセスを分析する。

3.1. 黄 (1999) —属性利用が生む多義—

以下、(16) の例文を使っていく。これは、話者が遠くから一人の人物がいるのを見たときの発話とする。

(16) 推量：(どうも) あの人(は)女のようだ。

(17) は黄 (1999) が分析で用いた用語である。それぞれの定義を示しておく。

- (17) a. 参照点：既に備え持っている知識概念。表現したい対象と対比するのに用いられる。例：「女」
- b. 新規対象：新しく取り込む概念。表現される対象。例：「あの人」
- c. 定義属性：その語彙項目であるか否かを判断するのに必要となっている意味属性。例：「女性」

- d. プロトタイプ属性：語彙項目から我々が連想する、或いは付与・期待している意味属性。例：「髪が長い」、「化粧をしている」、「柔らかい」、... etc.

(黄 1999: 11-12、一部改変)

推量用法の「ようだ」の「定義属性」と「プロトタイプ属性」は(18)のような関係を持つ。

- (18) a. 定義属性：推量における新規対象と参照点の間の定義属性の関係は、不明瞭な関係である。つまり、話し手が新規対象と参照点との定義属性の関係を捉えられない。例文(16)では、「あの人」が女なのか男なのか判断できない。
- b. プロトタイプ属性：話し手は新規対象の「あの人」から、「髪の毛が長い、化粧をしている、静か、...」といった特徴を感じ取る。これらの特徴が話し手の認識の中にある参照点「女」がもつプロトタイプ属性の特徴である...。

(黄 1999: 117-118)

前節での観察結果とすり合わせると、「推量」読みの場合は、主語が補部名詞句のプロトタイプ属性を備えているので、「主語 = 補部名詞句」(命題)として判断できるかどうか決めかねている状況ということになるだろう。

3.2. Miyagawa (2022) —丁寧語「-ます」の統語論—

本節では、「あの人は女のようだ」の統語構造を考察してみよう。「ようだ」は「ようだった」のように過去形になることから、法助動詞として機能しながら時制句(TP)の下に現れていることになる。そして、補部の「女-の-」は前節での観察から意味的に命題「女である」に等しいことが仮定されている。ここで統語的な矛盾が生じる。命題に対応する統語上のレベルがTPとすると、法助動詞としての「ようだ」が意味的には命題の外にありながら、時制要素がそのあとに付くという現象である。この問題を解決するのがMiyagawa (2022)の丁寧語「-ます」の統語論である。「-ます」も、話者が命題の聞き手に対して向けられている丁寧な態度の表現であるので命題の外に位置すると考えられるが、語順的には'-mas-ita,''-mas-en'のように時制要素や否定語がそのあとに付く。

- (19) a. Below tense: 花子はピザを食べ-まし-た
b. Below negation: 花子はピザを食べ-ませ-ん

(Miyagawa 2022: スライド p. 25, 日本語表記は発表者)

Miyagawa (2022)は、(20b)のように「-ます」がつくとその後はすべて丁寧形になっていく現象を挙げて、(21)を提案している。

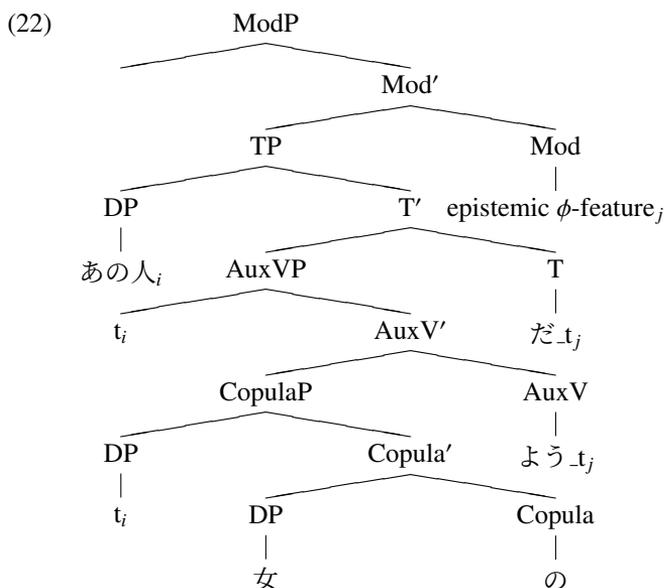
- (20) a. 荷物が届か-な-か-っ-た-だ-ろ-う-か?
b. 荷物が届き-ませ-ん-で-し-た-で-し-よ-う-か?

(Miyagawa 2022, スライド p. 28, 日本語表記は発表者)

- (21) *-mas-* contains an uninterpretable feature that needs to be valued. . . this feature is the allocutive ϕ -feature, . . . it is this allocutive ϕ -feature that raises from *-mas-* to C.

(Miyagawa 2022: 52)

「-ます」が持っている allocutive ϕ -feature が聞き手から認可を受けるために C Head まで移動する。その結果として、その素性が命題 (TP) をその領域に持つことになる、というメカニズムである。本稿では、Miyagawa (2022) のメカニズムを応用し、「-の-ようだ」は丁寧語と同様モダリティではあるが、認識「推量」の法助動詞であるので、epistemic ϕ -feature を持っているとし、その素性が認可されるために、TP より上の構造、ここでは ModP、に主要部移動をすると仮定しておく。



Mod Head まで移動した認識の ϕ -feature が TP (命題) をその領域にとっているの
で、命題を補部とする法助動詞として機能していると仮定する。統語部門でこの構造が
SPELL-OUT されると、LF 部門ではどのような意味の計算が生じているのだろうか、次
節では、LF で起こるプロセスを形式的に記述して、黄 (1999) の分析する「推量」の用
法と合致するかどうかみていくこととする。

3.3. 郡司 (2015) —コピュラ文の意味計算—

本節では、例文「あの人は女のようだ」の構文が統語構造で派生された場合、その LF
部門ではどのように意味が計算されているのかを形式的に表示して考察していく。

「推量」読みの「名詞句-の-ようだ」は「-の-」がコピュラ連体形として機能している
ため、例文は「あの人は女-である-ようだ」と言い換えが可能である。さらに、「である」
は断定の助動詞「だ」の改まった言い方である。²ここで、郡司 (2015) のコピュラ文「奈

²日本国語大辞典の語誌によると、「にてあり」から出た「である」が、「であ」を経て、最終的に室町期に
関東で「だ」が成立、上方では「であ」から「じゃ」が生じた、とある。

緒美は学生だ」の形式意味論的分析が引用できるだろう。まず「だ」の意味論について、群司 (2015: 16) は Montague の PTQ での *be* 動詞の意味論を簡略化 (外延化) したものと、(23) を提案している。³

$$(23) \text{ 外延的な「だ」: } \llbracket \text{だ} \rrbracket \Leftrightarrow \lambda P \lambda x P(\lambda y[x = y]) \quad (\text{群司 2015: 16})$$

次に、例文「奈緒美は学生だ」の意味は (24) のように計算されている。

$$(24) \begin{aligned} & \text{a. } \llbracket \text{学生} \rrbracket \Leftrightarrow \lambda P \exists z [\text{学生}'(z) \wedge P(z)] \\ & \text{b. } \llbracket \text{学生だ} \rrbracket \Leftrightarrow \llbracket \text{だ} \rrbracket (\llbracket \text{学生} \rrbracket) \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda P \lambda x P(\lambda y[x = y]) (\llbracket \text{学生} \rrbracket) \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda x \llbracket \text{学生} \rrbracket (\lambda y[x = y]) \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda x \lambda P \exists z [\text{学生}'(z) \wedge P(z)] (\lambda y[x = y]) \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda x \exists z [\text{学生}'(z) \wedge \lambda y [x = y](z)] \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda x \exists z [\text{学生}'(z) \wedge [x = z]] \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda x \text{学生}'(x) \\ & \text{c. } \llbracket \text{奈緒美} \rrbracket \Leftrightarrow \lambda P [P(n)] \\ & \text{d. } \llbracket \text{奈緒美は学生だ} \rrbracket \Leftrightarrow \llbracket \text{奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{学生だ} \rrbracket) \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda P [P(n)] (\llbracket \text{学生だ} \rrbracket) \\ & \quad \Leftrightarrow \llbracket \text{学生だ} \rrbracket (n) \\ & \quad \Leftrightarrow \lambda x \text{学生}'(x)(n) \\ & \quad \Leftrightarrow \text{学生}'(n) \end{aligned}$$

(群司 2015: 18)

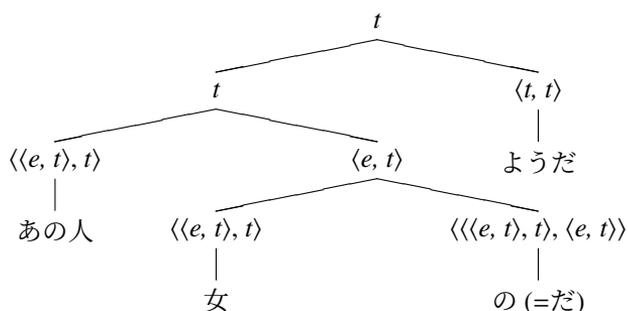
(24b) において、「だ」($\llbracket \text{だ} \rrbracket$) は一般化量化子の引数を取り、その「学生」は英語の *a student* に対応することから、存在量化を受けた一般化量化子としている。(cf. 群司 (2015: 17)) (24d) の最後の行で、個体 *n* (「奈緒美」) に関して、その個体は学生であるという意味が得られている。

3.4. 「推量」の「名詞句-の-ようだ」構文の意味計算

同じコピュラ文を補部名詞句と仮定する「推量」読みの「あの人は女のようだ」の意味論をみてみよう。なおこの例文は、話者が遠くからひとりの人物がいるのを見て、その特徴 (プロトタイプ属性) より、女性 (定義属性) がいるようにもみえるし、そうでないようにもみえる、という場面での発話と設定しておく。(25) はこの場面の意味タイプを表示したものである。「推量」読みでは主語の「あの人」も補部名詞句の「女」もともに $\langle\langle e, t \rangle, t \rangle$ の一般化量化子とする。

³詳しい説明は群司 (2015: 16) を参照のこと。

(25)



(26) は意味計算に用いる語彙である。(26b)の「は」は統語部門の格の要請で意味的貢献はない。(26d)でコピュラ連体形の「の」は「だ/である」の意味『だ』と同じとする。(26e)の「ようだ」は命題をとる一項述語としておく。⁴

- (26) a. 『あの人』 $\Leftrightarrow \lambda P [P(a)]$
 b. 『は』 $\Leftrightarrow \phi$
 c. 『女』 $\Leftrightarrow \lambda P \exists z [女'(z) \wedge P(z)]$
 d. 『の』 (= 『だ』) $\Leftrightarrow \lambda P \lambda x P(\lambda y [x = y])$
 e. 『ようだ』 $\Leftrightarrow ようだ'$

例文では、『の』 (= 『だ』) が (26a) の一般化量化子 (固有名詞) と (26c) の存在量化された一般化量化子 (普通名詞) をとることになる。例文の意味計算をみてみよう。(27a, b) の途中の計算は (24b, d) と同じなので結果だけ示しておく。

- (27) a. 『女の』
 $\Leftrightarrow 『の』(『女』)$
 $\Leftrightarrow \dots$
 $\Leftrightarrow \lambda x \exists z [女'(z) \wedge [x = z]]$
 $\Leftrightarrow \lambda x 女'(x)$
 b. 『あの人は女の』
 $\Leftrightarrow 『あの人』(『女の』)$
 $\Leftrightarrow \dots$
 $\Leftrightarrow 女'(a)$
 c. 『あの人は女のようだ』
 $\Leftrightarrow 『ようだ』(『あの人は女の』)$
 $\Leftrightarrow ようだ'(女'(a))$

(27b)で個体「あの人」に関してその個体は「女」であるという意味を、(27c)の最後の行で「ようだ」が「あの人は女の (=だ)」という命題を項にとっていることを示した。

⁴ 「推量」の「ようだ」自体の意味論的表記も示すべきであるが、今回の課題としたい。

4. 「比況」の「名詞句-の-ようだ」構文の統語構造と意味計算

「比況」読みの「名詞句-の-ようだ」については、「-の-」は連体助詞として機能し、「補部名詞句-の-」は「ようだ」の「よう（様）」を修飾する要素であると説明した。このような場合の「ようだ」を黄(1999)は属性抽出語と呼んでいる。「比況」読みの構文を分析する前に、黄の定義を引用しておく。

4.1. 黄(1999) —属性抽出語としての「ようだ」—

例文(28)について、「比況」(黄では「比喩」)の機能をする属性抽出語「よう」の用法を(29)と述べている。

(28) 比喩：あの人は（まるで）女のようだ。女のような人

(29) a. 参照点（「女」）の属性を抽出し、新規対象（「あの人」）に付加して使用している。…使用制限を決定しているのは新規対象と参照点の「定義属性」の関係であり、形容的な意味を決めているのは新規対象と参照点の「プロトタイプ属性」である。

b. （新規対象と参照点の）定義属性については…一致せず、全て分離の関係にある。…話し手が新規対象から認識した参照点との共通するプロトタイプ属性を明確に記述し出されている表現と言える。

c. 肯定形では、参照点の定義属性が新規対象の定義属性の一つ以上の否定を含意しているときしか使用できない（例：*あの女は女のようだ）。否定形になると、その否定がプロトタイプ属性しか否定しないため、新規対象の定義属性を含意する名詞でも使用できるようになる（例：あの女は女のようでない）。

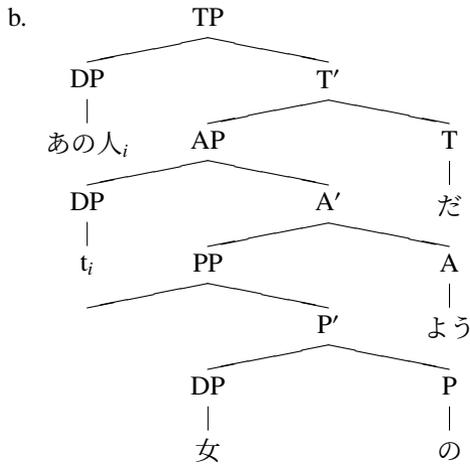
(黄 1999: 23, 49)

ここで参照したい指摘は、「比況」読みの「あの人は（まるで）女のようだ」構文では、主語「あの人」と補部名詞句「女」の定義属性は異なる、つまり、「あの人」は女性でないことと、「あの人」は女性のプロトタイプ属性をもっていることが「ようだ」が使用される条件であるという点である。これを踏まえて、次節で「比況」読みの構文の統語構造と意味計算を考察していくこととする。

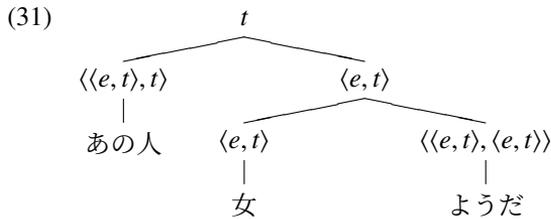
4.2. 「比況」の「名詞句-の-ようだ」構文の統語構造と意味計算

「比況」読みの場合は、黄(1999)の指摘から「女のようだ」が主語のプロトタイプ属性を叙述しているため、「女のようだ」を形容詞句、その中の連体助詞「の」を生成文法的に後置詞句の主要部と分析し、その統語構造を(30)に示す。

(30) a. あん人は（まるで）女のようだ。



(30) が SPELL-OUT して LF 部門に入り意味の計算が生じる。その時の意味タイプを (31) とする。



(31) では、「女」は主語のプロトタイプ属性を抽出する参照点でしかあり得ないので、存在量化された一般化量子ではなく、普通名詞である。

次に、意味計算に用いる語彙を挙げておく。「比況」読みにも用いられる「あの人 (a) は 女-の-ようだ」は、P のプロトタイプ属性 (Prototypical Attribute) を $PA(P)(a)$ として a をとる一項述語とした。ここでも統語的要請で現れた助詞の「は」と「の」は意味的貢献はないので空範疇とする。

- (32) a. $\llbracket \text{あの人} \rrbracket \Leftrightarrow \lambda P [P(a)]$
 b. $\llbracket \text{は} \rrbracket \Leftrightarrow \phi$
 c. $\llbracket \text{女} \rrbracket \Leftrightarrow \text{女}'$
 d. $\llbracket \text{の} \rrbracket \Leftrightarrow \phi$
 e. $\llbracket \text{ようだ} \rrbracket \Leftrightarrow \lambda P \lambda x [\neg P(x) \wedge PA(P)(x)]$

(33) が「あの人は (まるで) 女のようだ」の意味論となる。

- (33) a. $\llbracket \text{女(の)ようだ} \rrbracket \Leftrightarrow \llbracket \text{ようだ} \rrbracket (\llbracket \text{女} \rrbracket)$
 $\Leftrightarrow \lambda P \lambda x [\neg P(x) \wedge PA(P)(x)] (\llbracket \text{女} \rrbracket)$
 $\Leftrightarrow \lambda x [\neg \text{女}'(x) \wedge PA(\text{女}')(x)]$

- b. [[あの人(は)女(の) ようだ]]
 ⇔ [[あの人]]([女(の) ようだ])
 ⇔ $\lambda P [P(a)]([女(の) ようだ])$
 ⇔ [[女(の) ようだ]](a)
 ⇔ $\lambda x [\neg 女'(x) \wedge PA(女')(x)](a)$
 ⇔ $\neg 女'(a) \wedge PA(女')(a)$

(33b)の最後の行で、「あの人(は)女(の) ようだ」は個体 a に関して、その個体は「女性」でなく、かつ、その個体は女性のプロトタイプ属性 (ex. 「スカートを履いている」、「髪が長い」、「化粧をしている」、「柔らかい」等) をもつ、という特徴が得られた。黄 (1999) が抽出した属性の特徴と一致する。

5. おわりに

本論では「主語名詞句 + 補部名詞句-の-ようだ」構文の多義派生の条件について考察した。まず、黄 (1999) の主語と補部名詞句の属性利用による分析を紹介し、次に、その分析の生成文法理論による形式化を試みた。その形式化の帰結として、(法) 助動詞「ようだ」自体の違いだけでなく、(i) 補部名詞句の意味的特徴の違い、(ii) 「の」の機能の違い、および、(iii) 主語名詞句、補部名詞句と「の-ようだ」の構成性の違いが二つの解釈が生じる条件であることを明示した。

具体的には、(i) 「推量」の「女-の-ようだ」句の「の」はコピュラ連体詞であり、「あの人(は)女(の) ようだ」のような「命題」として解釈している。遠くにみえる人物イコール女性と推量している状況では、主語が固有名詞であれば補部名詞句も「個体」(存在量化された一般量化子) として解釈される。意味的に (1) 「女」+ 「の (=である)」→ (2) 「あの人」+ 「女-の (=である)」→ (3) 「あの人-女-の (=である)」+ 「ようだ」と構成される。

(ii) 「比況」の「補部名詞句-の-ようだ」句の「の」は助詞であり、例「女-の-ようだ」は形容詞句を形成している。そのときの補部名詞句は、その「特徴」(プロトタイプ属性) のみが解釈される。意味的に (1) 「女」+ 「のようだ」→ (2) 「あの人」+ 「女-のようだ」と構成される。

以上のことを提案した。

参考文献

- 板東美智子・黄愛玲 (2022) 「法助動詞と属性抽出語の交替現象—「名詞句-の-ようだ」構文を中心に—」大阪大学言語文化学会第 61 回大会発表スライド, 全 46 ページ。
 郡司隆男 (2015) 「日本語のコピュラ文の形式意味論的分析」*TALKS (Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin)* 18: 13–24。
 黄愛玲 (1999) 『「類似」を表す表現形式における属性利用—日本語と中国語の対照研究—』博士論文, 大阪大学大学院言語文化研究科。

- Miyagawa, Shigeru (2022a). 'Speaker-Addressee Phrase and Commitment Phrase: Syntax in the Treetops,' 大阪大学人文学研究科言語文化学専攻主催講演会. スライド. 全 46 ページ.
- Miyagawa, Shigeru (2022b) *Syntax in the Treetops*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 森山卓郎 (1995) 「推量・比喩比況・例示—「よう/みたいだ」の多義性をめぐって—」『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』 493–526. 明治書院.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2014) 「命題」. 『日本語文法事典』 日本語文法学会 (編) 613–615. 大修館.
- 奥津敬一郎 (1999) 『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノ—』 新装版 (1978 年第 1 刷). くろしお出版.
- 田中佑 (2012) 「被連体数量詞句の意味解釈」. 『言語学論叢 オンライン版』 第 5 号 (通巻 31 号) 33–42.

(受付日: 2022. 12. 10)